

いにしえ　いにしえ
時に古の女神，時に古の男性が用いた
シュメール語のエメサル

ピオトル・ミカロウスキ*
唐橋　文　訳

本稿の主題は、古代メソポタミア（おおよそ今日のイラクが占める地域）の言語である。メソポタミア，おそらくそれに限らず，地球上で最初に書き留められた言語はシュメール語であったが，遅くとも前十九世紀頃までに，それは日常語として用いられなくなっていた。しかしながら，シュメール語は，文学語（literary tongue）として，学識のある書記や学者たちによって，その後ほぼ二千年の間用いられた。この言語は歴史的にユニークで，既知の同じ系統に属す言語を持たない孤立言語である（isolate）。そのような言語は決して稀ではない。アイヌ語も，チベットのブルシャスキもそうであるし，他にも色々ある。日本語も長い間孤立言語と見なされてきたが，現在では沖縄語や琉球諸島語と関連する日本語族（Japonic family）の一員と考えられている¹⁾。現在使用されている言語が孤立言語であるということは，その話者にとってほとんど取るに足らないことで，コミュニケーションの妨げにはならない。しかし，現在使用されていない古代の言語を再構成しようとする時には大きな障害となる。楔形文字が十九世紀半ばにはじめて解読された時，学者たちは，アッカド語（すなわちバビロニア語とアッシリア語）の解読をかなり短期間で成し遂げた。それ

* Piotr Michałowski, *George G. Cameron Emeritus of Ancient Middle East Languages and Civilizations, University of Michigan*（ミシガン大学名誉教授）。

は、アッカド語がセム語の一つであることが判明し、ヘブライ語やアラム語、およびアラビア語の情報が解読の助けになったからである。同じ語族に属するそれらの言語が、アッカド語の再構成に必要なデータを供給したのであった。同じことが、後に、印欧語族のヒッタイト語やセム語族のウガリット語が解読された場合にもあてはまる²⁾。しかし、シュメール語は同じ系統に属す言語を持たない孤立言語であるため、その音韻体系や語彙を理解することはとても難しく、シュメール語自体の内的情報とシュメール・アッカド二言語併用文書のデータからのみ再構成されなければならない。その結果、シュメール語は一世紀以上にわたって研究されてきたが、いくつかの複雑な事柄が理解され始めたのはこの数十年のことにすぎない。沢山の研究課題がまだ手つかずの状態にあり、しかも、文法や詩歌、語彙の基本的な点の多くで、研究者たちの意見が異なっている。

現存する最古のシュメール語テキストは、メソポタミア南部の都市ウルクの神殿域から出土した前四千年紀末の行政文書である。ウルクは当時の西アジアにおける最大の都市で、実際、確かめられる限りでは、100ヘクタールを超える面積を持つ都市であった³⁾。ウルクから出土した5000点余りの粘土板文書のうち、いくらかの割合を占めているのが、次世代の書記を教育するために用いられた楔形文字の語彙表である。この種の学習用練習教材は、楔形文字の歴史を通して使用された。前2600年頃までには学習に詩的な文学作品も含まれるようになったが、現代の私たちには、そのような初期の作品はあまり良く理解できない。

シュメール語を表すシュメール語独自の社会言語学的な用語は、エメギルとエメサルである。エメギルという用語は、前三千年紀半ばから必ずしも明確でない意味合いで用いられてきたが、「エメギル（シュメール語）を知らない書記だって？それは、どんな書記だっていうのかい？」⁴⁾という古バビロニア時代の格言の一文からも読み取れるように、前十八世紀までに、それは、シュメール語一般を指す包括的なラベルになっていたと考

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）
えられる。それにはおそらくエメサルも含まれていたであろう。

そのエメサルが本稿のトピックである⁵⁾。「エメサル」という語は楔形文字資料に稀にしか登場せず，主に語彙表で，シュメール語の単語がエメサルで記述されていることを説明する用語として用いられている。エメサルについての重要な資料は，エメギルとエメサルの単語を横に並べ，それに対応するアッカド語を付した前一千年紀のグロッサリー（簡略辞典）である。シュメール語のこの二つの形態の主な違いは音韻である。以下に対応する音のいくつかを示したが，それらの対応はいつも規則正しい訳ではなく，標準シュメール語の一音素が一つ以上のエメサル音素に対応する場合もある。さらに，いくつかのエメサル単語は様式化された標準シュメール語のコンテキストで使用されることもあった。しかし，その場合，エメサルの単語が混じるからと言って，一節全部，あるいはテキスト全体をエメサルで朗吟するようなことは要求されなかった。

いくつかのエメサル単語は，それに対応する標準シュメール語の単語を短縮したか，あるいは，拡張したかのいずれかであるように思われる。その中から次のような例をあげることができる。

標準シュメール語	エメサル	意味
eger	ba-ar	壁
en	umun	主人，王

基本的単語の中には，次のように，少数ではあるが，説明不可能なものもある。これらは，標準シュメール語ではなく，エメサルにのみ保存された古い単語か，あるいは，方言的特徴のある単語ではないかと考えられる。

標準シュメール語	エメサル	意味
nin/ereš	gašan	女王，女主人
gu-za	aš-te	椅子
nitadam	mudna	婚約した男性

また、エメサルは、楔形文字の特別な使用方においても特徴がある。例えば、シラビック・ライティング—その中のいくつかはエメサルに特有—を多用することや、標準シュメール語の *uru*「都市」に対して *uru₂*「都市」のように視覚的に似ている同音の文字を用いることなどである。しかしながら、やっかいなことに、*uru₂* は標準シュメール語テキストにも登場し、同じ作品の異なる写本で *uru* がそれに置き換えられていることもある。

長い間、エメサルは「女言葉」(women's speech) として定義されたが、近年かなり異なる意見が出されるようになった。例えば、偉大なロシア人学者イーゴル・ディアコノフは、シュメール語の状況を、男性と女性が異なる方言を話す北東シベリアのチュクチャー語のそれと比べて、前者の見方を擁護した⁶⁾。しかし、そういった民族誌的な類似性に言語学者ゴードン・ウィッターカーが疑問を呈した⁷⁾。最近では、ゴンザロ・ルビオが「エメサルの使用は、物語の中の話し手やその演者の性別というよりもテキストのジャンルによって決まるのではないか」と述べている⁸⁾。

エメサルが「女言葉」あるいは性別方言 (gender dialect) であるという考えは、一見したところ牽強附会という訳ではない。結局のところ、ジェンダーは、感情的、実際の、社会的意味を織り交ぜた普遍的な人間の分類概念で、それらは言語表現に浸透している。ジェンダーは普遍的な人間の関心事で、言語学者ミカエル・ハリディは、それについて「どの言語でも、単語や音、構造は社会的価値で満たされるようになる傾向がある」と述べ、さらに、「様々な社会的方言は必ずしもカーストや階級と結びつく訳ではない。それらは、宗教的、世代的、性別、経済的 (都市あるいは田舎) であるかもしれないし、おそらく他にも色々あるであろう。ただし、それらの特徴づけるのが、その階層的性格 (hierarchical character) である。方言の社会的機能は社会秩序を表現し、記号化し、維持することである。そして社会的秩序とは基本的に階層的秩序である」と述べている⁹⁾。古代メソポタミアの社会は、地位とジェンダーを含めて階層的区別が浸透していた。

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

それが言語使用の様々な面に反映していたことは間違いない。このことは、シュメール語やアッカド語，アモリ語，アラム語など，地域と時代を問わず，どんな言語にもあてはまる。

すでに十九世紀に明らかにされたように，性別を反映した言語は，それぞれ特異性を有し，最大限のスペクトルから声の抑揚の微かな違いまで，また，単語の選択から全く異なる方言の使用まで，様々な形態を取り得る。南アメリカに長年滞在した偉大なフランス人の探検家アルシド・ドルビニ（Alcide d'Orbigny）は1839年に，「ある言語において，男性によって用いられる語の大半は，女性によって用いられる語と異なり，また，女性によって発せられた言葉は独特な語尾をとる。チキートス（Chiquitos）の言語のように，非常に良くこの特色を表している言語もあれば，親族関係の名称にのみその特色が見られる言語もある。昔から，この変則は，男を殺し，女をキープするというある特定の征服された人々（特にグアラニ）の慣習によって説明されてきたが，それは十分あり得るように思われる」と記した。これは，1901年にグレートブリテン・アイルランド王立人類学協会の著名な雑誌 *Man* の創刊号で，先駆的人类学者サー・ジェイムズ・ジョージ・フレイザーによって広く紹介され¹⁰⁾，翌年，偉大なフランス人社会学者エミール・デュルケームによってコメントされた。それ以来，男女のスピーチに見られるわずかな違いを分析する研究が数多くなされてきた。性別に基づく違いが，すでに3歳から5歳の英国人の子供たちの間に認められる事が多くの研究者たちによって指摘されている。日本語における女言葉は，広く学問的な研究と人々の議論の対象である。より極端なのは，南北アメリカやオーストラリアのいくつかの言語で見られるような，男女による異なる方言使用を特徴づける二極性である。オーストラリアのそのような言語の一つが，現在話者がほとんど消滅してしまったヤンユワ（Yanyuwa）で，男女が全く異なる方言を話す（ただし，周りのどの言語もこのような現象を共有していない¹¹⁾）。ディアコノフの見解に極めて重

要であったチュクチーの女言葉については、ある言語学者は、「おそらくほとんどの言語が、何らかの社会的カテゴリーを言語的差異で表示する。そのように表示される一般的な社会的カテゴリーは、名詞に関連する言語学的な意味でのジェンダーではなく、性別に関連する人類学的な意味でのジェンダーである。スピーチにおけるジェンダーの差異は、しばしば、イントネーションや声の高低などの韻律、ある特定の音素の発音、用いる語彙の違いに現れる」と述べている¹²⁾。

したがって、性別で異なる言語の使用が様々な形をとって古代西アジアに存在していたことが、比較研究の見地から想像される。メソポタミアの大きな都市は周辺地域と常に接触があり、そこでは疑いなく多様な言語が話されていた。都市の住民たちは、言語の壁を超えてコミュニケーションを取るために、色々な言語や方言を話すだけでなく、社会的であれ性別であれ、様々な階層に基づいた異なる言語使用域 (language register) — 職業語、泥棒や娼婦が用いる言葉のような仮説的な反言語、交易用語を含む — を用いた。おそらくクレオール言語さえ用いたのではないだろうか。そのような言語学的に豊かな社会を仮定するならば、多様な言語環境の中で、話者の性別による言葉の違いがあったことは疑いない。シュメール語も、まだ話し言葉として用いられていた時はそうであったろう。そして、女性特有の表現が今度は社会的な差別化を引き起こすのである。古代メソポタミアでは、エリート階級の個人宅は (おそらく他の階級でも)、シュメール語でアマ (/ama/) と呼ばれる、女性の占有域を有していた。それは、隔離した数部屋からなり、家主の妻に加えて、彼女の使用人、乳母、子守り、子供たちの場所であった。そこでは女言葉が優勢だったかもしれない。比較研究の情報を参考にすると、そこはおそらく、言語が刷新され、変化が生じる空間であったろう。しかしながら、そういったことは楔形文字記録に残されていない。私たちが会おうシュメール語やアッカド語は、すでに指摘したように、非常に形式化された表現手段で、絶えず変化する日常

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

語とはかなり異なっていた。

しかし、これらは、エメサルの定義に何らかの意味も持つのであろうか。結局、日常の話し言葉における言語表現の色々な形について仮説を立てたからといって、それを書き言葉の領域に無批判に移し替える理由はない。この脈絡において、「エメサル」という用語の使用が、前十八世紀以前のテキストではまだ発見されていないということに注意する必要がある。つまり、現在知られている全ての用例は、シュメール語がもはや話し言葉でなくなった時代のものである。したがって、自動的に、エメサルは私たちにとって文学的事象だということになる。その語源的な意味に基づいて、また、その限定的で制限された用法から、エメサルには、しばしば過去において（今日でも一般向けの本では）「女言葉」というラベルが貼られている。しかし、それならば、この単語（eme-SAL）は、シュメール語で eme munusa（eme munus.ak）と読まれるべきであろう。SAL の文字は、mi₂（mim）、munus、sal という三つの基本的な読みを有する。一番目は、/mi(m)/ という音節を表し、専ら三つの単語に使用されるにすぎない。二番目は「女」を意味する。私たちのトピックに関連する唯一のものは三番目の sal で、「薄い」「狭い」「繊細な」「細かい」などを意味する形容詞である。この脈絡で有益なのは同音異義の「エメサル」（eme sal）であろう。最初の単語 eme は剣や斧の「舌」を指し、全体で「薄い刃」を意味する。かくして、私たちが論じているエメサルをどのように定義しようとしても、「女言葉」という訳は正確とは言えない。むしろ、その社会言語学的用法というよりも、話し方に言及していると考えて「優雅な言葉」と解釈できるのではないだろうか。

女性の手による書き物にエメサルの形跡がないという事実を考慮に入れると、性別を反映したエメサルの複雑さは一層際立つ。楔形文字文学のほとんどは男性によって作られコピーされたが、エリート女性たち（全員王女たち）によって著されたシュメール語作品もわずかではあるが存在する。

最初期の作者はエンヘドゥアナという女性である¹³⁾。彼女は、前2400年頃、南メソポタミアの複数の独立都市国家を大きな強力な領域国家に統一した最初の支配者、アガデのサルゴン王の娘であった（実際に、それは世界最初の帝国と言われることもある）。独立した国々を内包する国家をまとめる戦略の一つとして、サルゴンは自分の娘をシュメールの最も権威のある宗教センターの一つであるウルの月神の最高祭司に任命した。後の伝承はシュメール語の三つの詩を彼女に帰しているが、それによって、彼女は史上初の女性作者となるだけでなく、男女を問わず名前のわかる最古の作者となる。三つの詩は全て、肉体的な愛および暴力と戦争の女神イナンナに何らかの点で関連する。逆説的なことに、この女神は他の文学テキストでは頻繁にエメサルを用いている。エンヘドゥアナが文字通りこれらの作品の作者であるかどうか議論の余地はあるが、そして、それは完全には解決され得ない問題であるが、それは、後の伝承が彼女を詩人だと主張したことに比べるとあまり重要ではない。同じことが、ニンシャタパダのような他の祭司・詩人の場合にも言える。ニンシャタパダは、エンヘドゥアナの数世紀後にシュメール語で詩的な文学書簡を著した人物で、やはり女王であった¹⁴⁾。これらの作品の中にエメサルの形跡は全く見られない。また、ある女性が送った現存する一通の日常的な手紙についても同じことが言える。もちろん、この手紙はおそらく男性の書記によって書かれたと論ずることもできるが、どのようにエメサルを定義しようとも、それは文学言語であって、行政文書や私的な経済的文書には使用されなかったのは事実である。

では、メソポタミア文学の中でエメサルはどのように用いられたのであろうか。少数の例を除けば、エメサルの使用は、定期的な神殿儀式や危機的な状況下で、神々の怒りを鎮めるために専ら「哀歌祭司」（シュメール語の *gala*、アッカド語の *kalû*）によって歌われた儀式用のテキスト、並びに、文学テキストにおいて一部の女神たち（他のコンテキストでは標準シ

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）シュメール語を流暢に操る）とその使者たちによるスピーチの直接引用部分に限られる。儀式哀歌は「哀歌祭司」によって毎日，定期的あるいは一時的な儀式で歌われた。そのような伝統は前一世紀まで続いた。その後もエメサルは数世紀の間神殿や公共の儀式で用いられたかもしれない。というのは，紀元後の最初の数世紀の間，メソポタミアの宗教的な慣習が中核地域およびエデッサやハランといった場所で継続されていたからである。

北部・南部を問わず，古バビロニア時代の主要な儀式の中心地には，高位に就いていたことが明らかな「哀歌歌い手長官」（シュメール語の *galamah*，アッカド語の *galamahhu*）と呼ばれるエメサルで書かれた哀歌の歌い手の長がいた。これらのエリート歌い手たちと祝祭の組織者たち，および地位の低いガラたちが哀歌を暗唱した。また時々，彼らは特別な式典のため新しく哀歌を創作することもあった。標準的な学習テキストと違い，前十八世紀の典礼式文が一つ以上のコピーで見つかることは稀で，また，コピーがあったとしても，コピーのテキスト間に大きなヴァリエーションが見られる。しかしながら，エメサルのテキストが，前十八世紀に書き留め始められるまで数千年間，もしそうでなかったとしても数百年間，日常的に，あるいは，祝典の神殿儀式の中で使用されてきたことは確かで疑いの余地はない。実際に，エメサル・テキストを粘土板に書き留めることはタブーであった可能性がかなり高い。

前一千年紀になると，標準シュメール語で引き続きコピーされたり唱えられたりした語彙表や魔術文書，および少数の古い詩を除けば，継承されたシュメール語テキストのほとんどが典礼用のエメサル哀歌であった。前二千年紀の古バビロニア時代の学習においては，標準シュメール語がその主要な部分を占め，エメサル作品は稀であった。しかし，「哀歌祭司」になることを定められた者たちは，彼らの追加学習の一部としてエメサルを特別に学んだようである。また，見習いの期間，年長者たちによって書き取りの練習をさせられたり，多くの場合父親から，音楽の伴奏，儀式の行

為や身体の動作とともに哀歌を学んで誦んじたりした。前一千年紀は、エメサルが儀式で使用された証拠が最もよく残されているにも関わらず、基本的な教育でそれが教えられたとする形跡はない。

数多くの典礼用哀歌を含むコーパスと、先に述べたような、抜粋したエメサル単語に対応するアッカド語をつけた二言語辞典を用いて、研究者たちはエメサルで書かれたテキストにでてくるほとんどの単語を同定することができた。エメサルと称されるテキストは、エメサルと標準シュメール語が様々に混じったものであることに注意する必要がある。実際に、作品全体がほぼエメサルで書かれている文学テキストは、前十八世紀頃の「二人の女の会話 B」だけである。

現存する最も古いエメサル・テキストは、都市国家ラガシュのギルス地区から出土した。これらのテキストの年代は、楔形文字に関する限り精確な科学的手法だとはとても言えないが、それらが書かれている文字の字体を分析研究することで推定されるにすぎない。いくつかのオリジナル粘土板の調査結果から、それらは前 2000 年以降のものではないかと思うが、現在の時点で最古の文学粘土板としてそれより一世紀後の時代に年代づけられているものよりは早いと思われる。これとは別に、正確に年代づけられる最初のエメサルの例は、前十八世紀の粘土板に見出される。それらは、二世紀以上前のウル第三王朝の王であったシュルギとシュシンの治世に帰されるいくつかの詩のコピーである。その中の一つで、イナンナ女神はシュルギにエメサルで恋歌を歌っているのだが、同じ詩の他の箇所では、彼に標準シュメール語で祝福を与えている。この詩については、以下でもう一度触れることにしたい。

エメサルに関する他の初期の証拠はあまりはっきりしない。「アガデの呪い」と称されるウル第三王朝、あるいはそれより少し前かもしれない時代に作られた詩で、アガデの都市とその政治体制を襲った破局を生き延び

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

た老女たちが「ああ，私のまちよ」（a uru₂-gu₁₀）と嘆く（202行）¹⁵⁾。これは，彼女たちがエメサルを用いている証拠と考えられるかもしれないが，先にも見たように，uru₂の文字が必ずしもエメサルを特徴づけるとは限らない。同じような曖昧さが，ウル第三王朝時代の文学テキストのカタログに記載されたオープニング・ライン，ur-saĝ piriĝ huš uru₂ me gal-gal「おお，強者よ，偉大なる神聖な儀式のまち（の？）猛々しいライオンよ」¹⁶⁾の判定を難しくしている。すなわち，オープニング・ラインしか残されていないため，これがどんな作品かわからないのである。

哀歌の他にエメサルがどこでどのように用いられたのか，あまりはつきりしない。一行にエメサル単語を一～二個しか含まない詩があるが，それは，その行全体をエメサルで読めという合図なのであろうか。そのような例から，「エメサル単語がわずかに混じっているのは，テキストが，事実上，もしくは完全に標準シュメール語で書かれていても，エメサルで読まれる事を意図していた可能性を示唆する」と考える研究者たちもいる。もしそうであるならば，女神たちによって話される，エメサル単語を一～二個しか含まない長い節はどうしたらよいのであろうか。そのような場合，最も頻繁に現れるエメサル単語の一つが e-ne-eĝ₃（標準シュメール語の inim/enim「言葉」）である。この語は神話「イナンナとエンキ」の中でいくつかの節に見いだされる。もう一つの神話「イナンナとエビフ」では，イナンナが何回も登場し，いつも標準シュメール語で語るのだが，その中にエメサル単語の例が一つだけある。それは，神名のエンリルに対応するムリルである（167行）。

儀式従事者を除くと，女神だけがエメサルで話したり歌ったりしているということから，標準的な意見は，エメサルは女神，また，稀に人間の女性のスピーチに用いられたとする。しかし，すでに指摘したように，これら同一の女性たちが標準シュメール語で発話しているのがしばしば見受けられるので，言語形態の選択に客観的な理由があるのかどうか，また，そ

れが、それぞれの作者の審美的、音韻的、あるいは偶然的な動機に依拠しているのかどうか、直ちに明らかではない。他方、女性以外の、例えば、ハエや悪鬼、また男神や雌牛などもシュメール語のこの変形を用いているように見えるケースもあるが、これらは、エメサルで記されている祭儀テキストにおける引用のため、話者が言語使用域によって特に何らかの方法でマークされている訳ではない。また、格言の大半は標準シュメール語であるが、エメサルを用いた格言もいくつか残されている。これらのエメサル格言は教育の初期段階で用いられた生徒の練習である。その中には、確かに格言と見なせるものもあれば、言葉を学習するために用いられた短い諺（ある研究者は「修辞学的な練習」と呼ぶ）もある。なおエメサル格言の一部は儀式哀歌の断片であると思われる¹⁷⁾。

エメサルの起源、その社会的機能、およびディスコース機能を説明しようとする試みがなされてきた。先に述べたように、先行研究では通常それは女言葉あるいは社会方言（*sociolect*）と定義された。一部の研究者たちは、地方言語にその起源があると考えた。例えば、ある専門家は、エメサルに特徴的な音韻変化のいくつかがシュメール東部の都市国家ラガシュから出土した前三千年紀のテキストに時折見出されることに触れ、エメサルが、シュメール語の一地方特有の方言（そこの書記たちは標準シュメール語を用いたので方言の存在が表面化しなかった）に基づかないにしても関連すると仮定した。

これらの提案のどれも説得的だとは言えない。より説得力があるのは、次のジェラルド・クーパーの議論である。すなわち、葬儀の哀歌は、元々女性に結びつけられるのであるが、結局、大部分が男性から成るガラ（*gala*）によって専ら歌われるようになった。そして、エメサルの語源は別として、おそらくそれが文書に書き留められるようになるずっと以前から存在したシュメール語の女言葉（というよりは、おそらく歌言葉）が廃れていく一方、ガラの哀歌の中に保たれ、ある種の文学的テキストで様式化されて用

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）
いられたという考え方である¹⁸⁾。それよりもっと早い時期でなかったと
したら，遅くても前十八世紀までに，不思議な成り行きではあるが，ガラ
たちがもはや葬儀に関連することはなくなり，彼らの職務は神殿における
儀式哀歌に限られた。

ガラのジェンダーが曖昧であることと，ガラが神の使者であることを示
唆するテキストを考慮して，彼らは宦官であったと考える研究者たちもい
るが，これら哀歌の専門家たちが去勢されていたとする直接証拠はない。
なお，この職における女性の例はごく少数に限られたようである。

アネ・ローネルトは，主要な女神たちが，国や戦争，政治に関わってい
る時は標準シュメール語を用いるのに対し，親密な女性特有の事柄に関わ
っている時はエメサルで述べたり歌ったりしていることを巧みに読み取っ
た。彼女は，味気なく Shulgi X と呼ばれている王碑文（後でもう一度そ
れに触れる）におけるイナンナ女神の二つの独白に見られる典型的なコン
トラストに注目した¹⁹⁾。この詩では，王が彼女の神殿に入る時，女神は，
王との性的交わりの準備をエメサルで歌うが，その後すぐに，彼女が，王
の政治や祭儀，軍事に関する将来を定める時は標準シュメール語を用いて
いる。この場合，異なる言語形態の使用を動機づけるのはイデオロギーな
のか，あるいは何か他のものなのか。古代メソポタミアの最も強大な力を
誇った王の一人で，世代を通して継承された詩歌の中でその死後何世紀も
の間褒め称えられたシュルギに関するこの詩を，次に詳察する。この詩で，
シュルギは彼の住むウルのまちから，愛と戦いの女神イナンナを祭ったメ
トロポリスのウルクへと赴く。女神にすっかり恋してしまった彼は，到着
して美装を整える²⁰⁾。

誠実な羊飼シュルギ，恋して，祭りの装束を身に纏い
式の被り物を王冠のように頭に頂く。
イナンナ女神が彼を見て褒め称え

自ら歌を作り

讃歌を歌う。

(次にエメサルで 14～41 行)

そして、次の文言がその後続く。

イナンナ女神、(月神) スエンの娘が

未来を決めた。

おお、シュルギ、ニンスムナ女神の息子よ！

(引き続き標準シュメール語で 49～72 行)

確かに、イナンナのこの二つの独白のトーンには違いがある。エメサルによる最初の独白は、愛情と大胆な性的表現に満ちているのに対し、標準シュメール語による二つ目の独白は、女神がシュルギに将来の政治的・軍事的成功を約束するものである。これに続いて、もう一人の女神を含めて他の神々が標準シュメール語で王に語りかける。従って、イナンナの最初の独白が、エメサル使用の唯一の節ということになる。しかしながら、もっと重要なことは、イナンナが王にエメサルで「歌い」、標準シュメール語で話していることである。すなわち、言語使用域の切り替えは、内容と語り口によって動機づけられているように思われる。ここでエメサルは、女性の官能性とセクシュアリティ、また、「話し」の詩文や散文に対して「歌」に結びつけられている。すなわち、エメサルは、単に「女言葉」ではない。

上記の一例は、シュメール文学に登場するエメサルの他の例と比較され得るであろうか。しかしながら、全てのテキストを見ていくことは不可能なので、他の主要なイナンナ女神関連テキストが、シュメール語の異なる形態(すなわちエメサル)をどのように用いているかを概観するにとどめたい。

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

最初に考察対象とするのは、「イナンナとエンキ」と呼ばれる，かなり断片的なテキストである²¹⁾。この神話には多くの独白場面があるが，イナンナがエメサルを用いているのは，歌っているかどうかはわからないが，自分の性器を褒め称え，予想される性行為を描写する一カ所にすぎない。先ほど引用したシュルギ讃歌とならんで生徒たちが学んだもう一つのテキストは，私たちが「イナンナとシュカレトウダ」と呼ぶ神話である。あまり穏やかでないこの詩は，どのようにイナンナが，彼女の住処のウルクから遠く離れた山々を旅して，ポプラの大木の下で眠っている時にシュカレトウダという者に強姦されたかを描写する。いくつかのエピソードの後に，次の場面が現れる²²⁾。

夜が明け，太陽神が昇ると

女は自分自身を丁寧に調べた。

聖なるイナンナ女神は自分自身を丁寧に調べた。

「ああ，誰が私に償ってくれるのか。

ああ，誰が私に起こったことの代償を払う（？）のか。

私の父エンキ神の心配事であるべきではないのか。」

と彼女は嘆いた。

聖なるイナンナ女神はエリドゥの深淵へ足を運んだ。

そして，彼の前にひれ伏し，手を差し伸ばして（次のように言った）。

「おお，父なるエンキ神よ。私は償われるべきです。誰かが代償を払うべきです。

深淵からあの男を私に引き渡してくださるのなら

私は喜んで（ウルクのまちの）私のエアンナ神殿に戻りましょう。」

斜体字はエメサルで発せられた言葉，他は標準シュメール語である。この箇所は，イナンナが自分を苦しめる恐ろしい運命（侮辱）に対しての返報

を求めていることから、彼女が深く傷つき苦悶していることが表現されていると解釈できる。そして、その嘆きはエメサルで表されている。最終的にシュカレトウダはイナンナ女神に手渡され、彼女が彼に死を宣告することで復讐を成し遂げる。物語の終りの注目すべき補足記事で、イナンナ女神は専ら標準シュメール語で次のように語る。

聖なるイナンナ女神はシュカレトウダに次のように言った。

「さあ、お前は死ぬべきだが、私のおかげでお前の名前が忘れられることはないだろう。

お前の名前は歌の中で生き続け、その歌は甘く快いであろう。

お前の歌い手たちは、王の館でそれらの歌を楽しく歌い

羊飼たちは、バターをかきまぜながらそれらを甘く歌い

お前の羊飼たちは、羊を放牧するところにお前の名前を携え

荒野がお前の住処になるであろう。」

イナンナは仕返しを成し遂げる一方、彼女を苦しめた者に永遠の名声、すなわち、偉大なる王たちと神話の英雄たちにのみ与えられる類いの記憶—いづれにしてもそれは彼女と結びつけられたものであるが—を約束する。皮肉にもシュカレトウダは歌の中で記憶される。しかし、彼女の約束はエメサルで表現されてはいない。

イナンナ女神に関する断片的な神話は他に二つあるが、彼女がそこで話すどの節にもエメサルは用いられていない。しかし、もう一つ、「イナンナとビルル」と称される、イナンナ女神を主人公とする神話がある。一つの写本からのみ知られるこの作品は、イナンナ女神とその恋人で夫ドゥムジの複雑な関係を描く一連のテキスト群に属す。この物語のある時点で、ドゥムジは、彼を捕まえるために送られてきた冥界の悪鬼を逃れ、ビルルという名の老女の家に隠れるが、彼女は彼を追手に渡す。破滅的な運命を

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

辿るイナンナ女神の恋人たちの例にもれず，この気の毒な若者も冥界に追いやられてしまう訳であるが，ここでは，イナンナ女神は彼女の恋人を裏切った老女に報復している（これに対し他では，ドゥムジがイナンナ女神の怒りを買って冥界に落とされる）。このテキストの最初の部分はやや断片的であるが，何が起こったのかすでに気づいてか，あるいは悪い予感がしてか，イナンナ女神が恋人を想って慟哭している様子が読み取れる。そして，彼女は母親に羊飼であるドゥムジを探しに行く許可を求める。彼女の哀歌とリクエストは，エメサルと解釈できる単語を一つずつしか含まないが，全体がエメサルだったのかもしれない。何が起こったか彼女が知るやいなや，次の場面が展開する²³⁾。

女王は夫のために歌を書き，彼のために歌を作った。

聖なるイナンナ女神がドゥムジのために歌を書き，彼のために歌を作った。（以下エメサルで）

「おお，横たわる人よ，横たわる羊飼よ，あなたは見張りに立つ。

ドゥムジ，横たわる人よ，あなたは見張りに立つ。

天空神の獅子王（Ama-ušum-gal-an-na），横たわる人よ，あなたは見張りに立つ。

夜明けから起きて，あなたは私の羊の見張りに立つ。

夜の眠りに就くまで，あなたは私の羊の見張りに立つ。」

神話の終わりの部分で，彼女は次のような哀歌をエメサルで歌う。

あなたのための哀歌，あなたのための哀歌，私はあなたのために哀歌を歌う。

あなたのための哀歌，私はあなたのために哀歌を歌う。

この哀歌の後に、次の4行からなる極めて啓示的なナラティヴが続くが、それらは、物語の作者／語り手の声を伝えるものである。そして、その後
に前述の哀歌がもう一度歌われる。

「かくして、戦いの女神は婚約者に匹敵することを証明した。

かくして、聖なるイナンナ女神は羊飼ドゥムジに匹敵することを証明した。

彼の休息所を心地よくすることがイナンナ女神に認められた。

彼の復讐をすることがイナンナ女神に認められた。」

イナンナ女神の二度繰り返される哀歌に挟まれた、この挿入部分は、この詩が女性によって語られる、あるいは、演じられることが意図されていたことの証と考えられるかもしれない。そして、この詩の結びは、作者の声が哀歌と融合するように、語られたというよりもむしろ歌われた可能性が高い。

ここでもエメサルは、非常に感情的な瞬間と歌の両方に関連している。しかし、状況は、イナンナ・ドゥムジに関する一連の短い恋愛詩（中には極めてエロチックな詩もある）において少々異なる。一人称のイナンナ女神が標準シュメール語を用いる詩もあれば、彼女がエメサルを用いている詩もある。後者において会話形式で用いられるエメサルは、二人の恋人のうち誰が話しているのかを明らかにするが、勿論、そうでないケースもある。すなわち、エメサルの使用は、そのような詩歌でエロティシズムとジェンダーに結びついていると言える一方、必ずしもその使用が義務づけられていた訳ではなさそうである。その差異は、個々の詩歌の起源に拠っているのかもしれない。

最後に、二つの優れた哀歌を取り上げたい。それらは、前三千年紀末にメソポタミア全域を支配した強大な国の都で、月神ナンナとその配偶神ニ

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

ンガルを祭るウルが，前 2000 年頃陥落したことを記念して記されたものである。前述のシュルギ，彼の父，そして，彼の三人の後継者によって治められたこの国の崩壊は，まさに大悲劇として記憶されると同時に，後のシュメール語文学の多くがこれらウルの王たちの時代に起源を持つため，なお一層思い起こされる。現在，それらの二つの詩歌は，「シュメールとウルの破壊についての哀歌」（The Lamentation over the Destruction of Sumer and Ur）²⁴⁾，「ウル of 破壊についての哀歌」（The Lamentation over the Destruction of Ur）²⁵⁾ という様に幾分誤解を招くタイトルを付けられているが，前者はナンナ神によって，後者は彼の配偶神ニンガルによって歌われているので，「ナンナ神の哀歌」（Nanna's Lament）および「ニンガル女神の哀歌」（Ningal's Lament）という名称の方が適切であろう。予想される様に，前者が標準的な文学シュメール語で書かれているのに対し，後者はエメサルで記されている。

儀式の場面を除いた，エメサルの主な使用についての，かなり複雑な議論を要約すると，それは，女性（ほとんどの場合女神），感情が高揚した詩的な瞬間，女性の観点からのセックスとエロティシズム，そして，とりわけ歌と結びついている。このような異質な特徴の組み合わせを説明するのは難しいが，エメサルを「女言葉」や「方言」とする定義は，これら全ての特色を説明するにはあまりにも限定的であろう。

これらの事実を心にとめて，エメサルの起源を性別方言（genderlect）に求めるよりも，それとは幾分違った見方を提案したい。先ほど列挙した様々な特徴に共通している点があるとすれば，それは，「感情の（を表す）」という形容詞であろう。言語が感情を記号化する方法には色々あるが，著名な言語学者エドワード・スタンキビッチによる古典的なエッセイが，それについて最もよく説明している。彼は，「感情を表す」は言語の持つ沢山の機能の一つで，しばしば，文法や音声，語彙の通常の認知的使用からの逸脱によって表現されるとする。それらの逸脱は感情表出の手段で，例

えば、隠喩的用語や特別な複合語の使用、ジェンダーや相（アスペクト）あるいは叙法（モード）などの動詞のカテゴリーの切り替え、音声の繰り返し、頭韻など、様々な形で表される。スタンキビッチが説明したように、一部の言語は、感情を表現する際に音韻手段を用いる²⁶⁾。

アメリカ・インディアンの言語の中で、フィ Chol (Huichol) とサハプティン (Sahaptin) に感情表出的硬口蓋化 (expressive palatalization) が見られる。それは、フィ Chol では、愛情のこもった会話、子供への話しかけ、子供同士の会話、または、歌の中などで用いられる。そこでは、/t, c, n/ を /l', c', n'/ に、有声の /z/ と /t/ (歯茎ふるえ音) を /s/ と /θ/ (あるいは /S/) に、/r/ (そり舌はじき音) を /R/ (歯茎はじき音) または側音の /ll/ に置き換えることによって、感情が表現される (例: *kiyezi* 「棒」に対し *kiyesi* 「棒切れ」、*muzure* 「赤」に対し *musule* 「赤くて可愛い」)。サハプティンでは、感情表現は、軟口蓋音を硬口蓋音に、/s/ と /n/ をそれぞれ /S/ と /ll/ に置き換えることで示される。

このような類似性を考慮すると、エメサルを、その実際の起源が何であろうと、シュメール語において言語の感情表現機能を担う形式化された手段であると見なすことができる—それは、歴史的な理由により、女性と女性のセクシュアリティに結びついてはいるが。

この提案を押し進め、すでに私が一度ならず言及したシュルギ讃歌に戻らるなら、イナンナ女神が王に語りかける二つの節は言語の形においてのみならず、語り方においても異なることが思い出されよう。すなわち、標準シュメール語で王について語るのに対し、エメサルで王に歌う。これも、感情を表す言語表現の一つと捉えることができる。確かに、歌うことは、究極的な感情表現であると言えるであろう。そして、歌は、感情を表す言

時に古の女神，時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル（唐橋）

語一般と同じように，代替の言語的手段によってしばしば表現される。色々な社会で，歌うことは，しばしば単に技術的な理由から，特定の方言や表現様式に限られている。歌う際，音は母音でのみ保たれるので，歌い手が，豊かな音色を有する方言の特色を取り入れるのはよく見られることである。スピーチと歌が異なる言語あるいは方言でなされる社会もある。これは，民族誌学的に記録された非常に興味深い事例を思い起こさせる。それは，インドネシア東部の南西マルク（Maluku）地方で，異なる言語や方言を話す人々によって歌う時にのみ用いられるリラスニアラ（Lirasniara），すなわち「歌話」（song-talk）と呼ばれる歌言語である²⁷⁾。この地域の特徴は，様々な個人言語（idiolects）や方言，さらには，そのほとんどが同じ祖語（protolanguage）から派生したと考えられるオーストロネシア語族の同じ語派に属すにもかかわらず，お互いに理解不可能な言語が多数存在することである。それらの話者たちは，ある非関連語の話者も含めて，歌う時にはリラスニアラを用いるのである。それは元々異なる言語間の意思伝達のために用いられた仲間うち言葉（jargon）であったかもしれない。リラスニアラは，その起源が何であれ，それぞれの言語の特徴を，幾分変更されたとしても，共有しているので，皆に受け入れられたのであった。エメサルは，これとは非常に異なる社会的・言語学的環境にあったが，リラスニアラの特徴をいくつか有していると考えられる。

本稿は，前四千年紀のイナンナ女神の都市ウルクから今日の東インドネシアまでを概観することによって，エメサルの概念を取り巻く問題の複雑さを示し，それを「女言葉」と容易に定義することが不適切であることを明らかにした。シュメール語の初期の段階で，感情を表す（時に発声された）言葉に音韻変化がともなうことがあり，それが女性達の歌う哀歌において形式化され，そして，クーパーの仮説に従えば，それが結局ガラ（gala）によって受け継がれたと考えられる。そして，それは二次的な発展を遂げ，

女神たちの言葉を書き表すためにも用いられたと推測できる。実際に、それは、イナンナ女神の場合には、彼女が、男性的な武勇と政治を司る役割においてではなく、女性特有の感情を表す役割を演じる時のみ現れる。こういった言語体系の切り換え（code-switching）が、強い感情を表現するために用いられる様式上の工夫であることは十分に立証されている。その様な感情を表す日常的な言語は、書き言葉の他の様々な決まりごとと同じ様に、文章で使用されることは大体において避けられる。

主にエメサルが用いられた文化領域、すなわち哀歌の歌唱は、早い時代には、書かれたものに頼ることなしに口承で何世代もの間父から息子に詩歌を伝えた祭儀の専門家たちによって実践された。実際に、その様なテキストを粘土板に刻むことは、前二千年紀以前はタブーだったかもしれない。かくして、エメサル詩歌が編集・標準化されて書き留められるようになる前は、各地域あるいは各家で歌唱の伝統があったこと、そして、それが、現存する最初期のエメサル哀歌に見られるテキスト間の変異と不一致の原因の一部となったことが考えられる。それに関して、ポール・デルネロも「それぞれの哀歌の内容（少なくとも古バビロニア時代において）は、文字伝承において固定され標準化されたというよりも、口頭実演のための翻案と改変にオープンであった」と述べている。

エメサルについてのこれからの研究は、私が繰り返し主張してきた様に、それが女言葉だという単純な概念を放棄する必要がある。むしろ、古典的なプラハ学派流に、残留語や権力、社会的役割、およびジェンダーの複雑な関係を言語の様々な機能を通して濾過されたものとして研究することを提案したい。そこにはまた、口承と読み書き能力、さらには、このユニークな表現形態を特徴付ける音楽と歌の影響も含まれるであろう。

[付記]

本稿は人文研の研究会チーム「歴史の中の「個」と「共同体」：社会史を超えて」

時に古の女神, 時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル (唐橋)

の研究会で, ピオトル・ミカロウスキ教授が2018年2月9日に多摩キャンパス2号館4階会議室2において行った講演をもとにしている。

注

- 1) 孤立言語については, Lyle Campbell, *Language Isolates and their History*, in *Language Isolates*, ed. Lyle Campbell. London: Routledge, 2017, pp. 1-18 を参照せよ。また, シュメール語を含む古代西アジアの孤立言語については, 同上書の中に収められている Piotr Michalowski, *Ancient Near Eastern and European Isolates*, pp. 19-58 を参照せよ。
- 2) 楔形文字の解読については, Jean Bottéro, *Mesopotamia: Writing, Reasoning and the Gods*, translated by y Zainab Bahrani and Marc Van De Mieroop. Chicago: Chicago University Press, 1992, pp. 55-66 を参照せよ。
- 3) Hans J. Nissen, *The Archaic Texts from Uruk*. *World Archaeology* 17 (1986): 317-34.
- 4) *Proverb Collection 2: 47* (Bendt Alster, *Proverbs of Ancient Sumer: The World's Earliest Proverb Collections*, vol 1. Bethesda, MD: CDL Press, 1997, p. 54).
- 5) エメサルについての詳細な先行研究は, Manfred K. Schretter, *Emesal-Studien*. Innsbrucker Beiträge zur Kulturwissenschaft, Sonderheft 69. Innsbruck: Universität Innsbruck, 1990 を参照せよ。
- 6) Igor M. Diakonoff, *Ancient Writing and Ancient Written Language: Pitfalls and Peculiarities in the study of Sumerian*, in *Sumerological Studies in Honor of Thorkild Jacobsen on his Seventieth Birthday, June 7, 1974*, ed. Stephen J. Lieberman. Assyriological Studies, 20. Chicago: University of Chicago Press, 1974, p. 114.
- 7) Gordon Whittaker, *Linguistic Anthropology and the Study of Emesal as (a) Women's Language*, in *Sex and Gender in the Ancient Near East: Proceedings of the 45th Rencontre Assyriologique Internationale*, vol. 2, ed. Robert Whiting and Simo Parpola. Helsinki: Neo-Assyrian Text Corpus Project, 2002, pp. 633-44.
- 8) Gonzalo Rubio, *Sumerian Morphology*, in *Morphologies of Asia and Africa*, ed. Alan S. Kaye. Winona Lake: Eisenbrauns, 2007, p. 1354.
- 9) M. A. K. Halliday, *Anti-Languages*. *American Anthropologist* 78 (1976): 572.
- 10) J. G. Frazer, *Men's Language and Women's Language*. *Man* 1 (1901): 154-55. また, Schretter, *Emesal-Studien*, p. 109 も参照せよ。
- 11) J. Bradley, *Men Speak One Way, Women Another*. *Aboriginal Linguistics* 1 (1988): 56-64.
- 12) Michael Dunn, *Chukchi Women's Language: A Historical-Comparative Perspective*. *Anthropological Linguistics* 42 (2000): 305.
- 13) Joan Goodnick Westenholz, *Enheduanna, En-Priestess, Hen of Nanna, Spouse of*

- Nanna, in *DUMU-E₂-DUB-BA-A: Studies in Honor of Åke W. Sjöberg*, ed. Hermann Behrens, Darlene Loding, and Martha Roth, Philadelphia: University Museum, 1989, pp. 539–56.
- 14) Nicole Maria Brisch, *Tradition and the Poetics of Innovation: Sumerian Court Literature of the Larsa Dynasty (c. 2003–1763 BCE)*. AOAT 339. Münster: Ugarit-Verlag, 2007, pp. 246–53.
- 15) Jerrold S. Cooper, *The Curse of Agade*. Baltimore: Johns Hopkins University Press, 1983, pp. 58–59.
- 16) William W. Hallo, On the Antiquity of Sumerian Literature. *Journal of the American Oriental Society* 83 (1963): 170, l. 39.
- 17) Uri Gabbay, Lamentful Proverbs or Proverbial Laments? Intertextual Connections Between Sumerian Proverbs and Emesal Laments. *Journal of Cuneiform Studies* 63 (2011): 51–64.
- 18) Jerrold S. Cooper, Genre, Gender and the Sumerian Lamentation. *Journal of Cuneiform Studies* (2006) 58: 39–47.
- 19) Anne Loehnert, Scribes and Singers of Emesal Lamentations in Ancient Mesopotamia in the Second Millennium BCE, in *Papers on Ancient Literatures: Greece, Rome and the Near East*, ed. Ettore Cingano and Lucio Milano. Quaderni del Dipartimento di Scienze dell'Antichità e del Vicino Oriente, 4. Padua: Sargon, 2008, pp. 421–47.
- 20) Jacob Klein, *Three Šulgi Hymns: Sumerian Royal Hymns Glorifying King Šulgi of Ur*. Ramat-Gan: Bar Ilan University Press, 1981, pp. 136–41.
- 21) Gertrud Farber-Flügge, *Der Mythos "Inanna und Enki" unter besonderer Berücksichtigung der Liste der me*. Studia Pohl 10. Rome: Biblical Institute Press, 1973.
- 22) Konrad Volk, *Inanna und Šukaletuda. Zur historisch-politischen Literaturwerkes*. SANTAG 3. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag, 1995, pp. 130–33, ll. 239–249.
- 23) Thorkild Jacobsen and Samuel N. Kramer, The Myth of Inanna and Bilulu. *Journal of Near Eastern Studies* 12 (1953): 160–88. このテキストはインターネット・サイト Electronic Text Corpus of Sumerian Literature でも参照可 (<http://etcsl.lorinst.ox.ac.uk/cgi-bin/etcsl.cgi?text=c.1.4.4&display=Crit&charenc=gcirc#>)。なお、最近の翻訳は、Alhena Gadotti, *The Feminine in Myths and Epics*, in *Women in the Ancient Near East: A Sourcebook*, ed. Mark Chavalas, London and New York: Routledge, 2004, pp. 47–51。
- 24) Piotr Michalowski, *The Lamentation over the Destruction of Sumer and Ur*. Mesopotamian Civilizations 1. Winona Lake: Eisenbrauns, 1989.
- 25) Nili Samet, *The Lamentation over the Destruction of Ur*. Mesopotamian Civilizations 18. Winona Lake: Eisenbrauns, 2014.
- 26) Edward Stankiewicz, Problems of Emotive Language, in *Approaches to Semiotics*:

時に古の女神, 時に古の男性が用いたシュメール語のエメサル (唐橋)

Cultural Anthropology, Education, Linguistics, Psychiatry, Psychology: Transactions of the Indiana University Conference on Paralinguistics and Kinesics, ed. Thomas Sebeok, Alfred S. Hayes, and Mary Catherine Bateson. *Janua Linguarum Series Maior*, 15. The Hague: Mouton, 1964, p. 250.

27) Aone van Engelenhoven, Lirasniara, the Sung Language of Southwest Maluku (East-Indonesia). *Wacana* 12 (2010): 143–61.